和字正濫鈔

ホ 2
4802
1

水2
4802
1
和
五
冊號
函

和字正濫鈔 卷一 并序

日本紀中訓言語等字云末古登。末者眞也美言之詞猶木云眞木。玉云眞玉之類。古登者與事字訓義並通。蓋至理具事翼輪相雙。有事必有言。有言必有事。故古事記等常多通用於心無偽曰末古古呂。於言無偽曰末古登。信以弗五常信誠也。準人言爲信。誠亦言成製字者。不从心从言訓字者。末古古呂言末古登。因

心之慤實全在言中取信於外又信古文訟也
案製字意言即心也十口以傳古雖聖不聞聲
何以得知情況於凡庸乎粤金人緘口永鎖禍
門而不開淨名結舌乍坐寂室而無動彼是世
典此亦常教更有諸佛自證法毗盧字輪瑜伽
字母等是其極致誰信玄妙卻在聲字請示赫
日明證令疑冰解涅槃經曰所言字者名曰涅
槃常故不流守護經曰釋迦牟尼佛言我觀唵

字得成正覺十方世界三世諸佛不觀唵字得
成佛者無有是處智論曰法身佛常放光明常
說法於戲規以畫圓末必還端本有實相流而
布世所以九字咒能避五兵等成辨諸事木瓜
名及字能瘥轉筋空文妄語不知之愆譬如飲
食無節水穀卻生痾聲字分明義趣茲彰不可
忽緒者也和邦者曜靈垂統之祕區天孫降駕
之上域也雖僻逼東垂聲韻最寥亮詳雅能通

華梵故言有靈驗祝詛各從其所欲神日本磐
余彦天皇征中洲猾賊之日祭神祇革新水等
名以作威稜果獲遂鴻業如此之驗國史所記
神世人代不可枚舉萬葉集曰言靈之左吉播
布國又曰事靈之所佐國是此謂也神氣化神
號曰天御柱國御柱命息之在身猶屋之有柱
故以名之莊子曰大塊噫氣其名爲風經說息
爲根本命金剛爲天地柱豈徒然乎又梵文和

舊譯音新翻音嚩字經說爲言說義爲最上乘聲金剛
手菩薩位在東方亦以和字爲種子國號懸會
貴言良有所以也梵語法依音釋必不待義故
或曰倭奴國相傳昔日本爲倭國
首何國答詞初云我國仍譯名倭國見于釋日
本紀愚按玉篇倭於爲切順皃烏禾切國名據
此先有此字有兩音其烏禾切義闕後假以譯
我國乎和字吳音倭通故二字通用奴乃同野
島亦曰奴島是其證也中華人爲奴僕之奴妹
知方言也雖然如此上世淳朴而無文字蓋待中華
耶譽田天皇馭宇之世百濟國奉詔貢博士王

仁從是浸親紙墨假字記和語後及通中華逾
究精奥然和字之學闃無所聞學書黄口者寫
難波津之什摹安積山之唫才爲始歩曁于我
埜山淮竺墳字毋有四十七言裁以呂波歌世上
人溥學至今則之以有限字述無窮心可謂千
古絶妙百世依憑實我國字母也取梵文配和
語其要有十四音謂安以宇江遠爲韻加左太
奈波末也良和爲聲體阿雖在韻兼聲諸音本

源九聲四韻相交生三十六音摠五十音以括
天下聲韻考萬葉集等振古省伊于要三音爾
乃諸書與以呂波唯聚散之異而已猶有音相
似易濫者中葉以來學識俱降且不致意遂則
匪翅混以爲遠於等迄于四位音位爲寄椎日本紀等
志比逢阿比寄藍阿爲木居古爲寄繼古比縱令有斧正之
手典據不明訛謬尚繁余介之懷久矣因繙曩
編足可證粗辯樗栲以便流俗未檢的據者姑

闕不強勒爲五卷名曰和字正濫鈔焉元祿癸酉二月二十有一日序

一世に行阿といふ人の假名文字遣といふ和あり
てこれを序に云。京極中納言定家卿家集指遺愚草
乃清書を狛文河内前司炊助于時大親行に挑ましれ
る時。親行アて云。をとにはをへいゐひをの文字ハあ
からいくる語あったらてこそ字のこんわさぐるなる
べく。然る氏決をとて。ほ字のために宮なるべきを
英門に尸下に。かしたう日来よりわ思ひちがへるな
りけるバ主爨大炊唐名ゲ下存のゑ出てこれを作れ

々の万大概わけはきくをよすれ不悉其理相はゝら
やて外合題をゝれ乗紙ゝ久字遣を定半釈切ら
抄出已渡鰐やからく行阿思案ゝるよ雅者の製作
らゝてゝ名の拾遺の字をゝ伊呂波よ漏(もれ)ゝて久字
の数乃ゝくるれよゝ内ひをれ已へ同読のゝにて知
ぬ各別乃要用ゝつゝふへき漏を拾る先達の釈出漏
されゝゝとゝあゝ万是非の迷をのらかんがためよ
返て勘ふるのゝふゝにゝすゝ文よゝほゝわはむうふゝ

字等我あゝゝゝくゝゝるゝ乗ゝを加ほいをよ
よまれゝわゝはよかゝゝふむいうよまゝらふいみうよお
ゝきゝよゝうゝて已等をゝ出ゝて阪ゝゝよゝ抄不の
問等あゝわゝといへゝゝ是よゝて准據すへゝゝれ仍ゝ孫
ゝ此勘勒を守て源祝ゝゝ尾ゝ此序ゝゝに行ゝ
釈行の抄を披見ゝれたゝわゝゝれゝゝゝゝは失
ゝゝれゝゝゝ文ゝゝゝ行ゝの抄乃中よ宝て皆載ゝる
べゝ我ゝよ混乱釈おほゝさゝて釈行し世俗流布の

假名よりせいきくらゐ。又行阿の除られ中よ
あやまり出来るゝ。又行阿の勧めくれたるほわ
は笥よりも混乱あり。其用のるすもるさるあゝず。
もようとて。ゆ撰ふ所日本紀よりこ代実録り
ゆまての國史舊事紀古事記萬葉集新撰字
集集古語拾遺延喜式和名集のたぐひ。古今集
笥及び諸家集まてよ。假名よ化とすべきるすあれ
ど。えなぶよりらて。引て先を證ず。次第いろはよ

りていろり初む。膽色岩などトの字ときこいろ
はよ任ず。為やすかゝんぐたあるり。云の中下よあり
いて次よ別よ載を。鶏冠のごとく。上の字次第い
ろはなり次よ。ねよ上のごとく。次よひ。見ハ中下よあ
て。音伎いねよまぐよを附て出ず。次よをたほ右よ同
し。祝りのほをいそれぢ。ハへ笥よ消ゝふりよる見
ゝず次よ。ゑへえおれ。次よわは。見ハ上よありてハ
まぐふりなり。中下よあてもる使よりてはの字

わと変してはぐくまれよ。えわ。次よはをおく。次ようふ。
乾とまき中下よりてふの字うと写ゆうことあるか
なよ出す。そが初字のくあるよはうまさるすどもかく
考えたるうあり。ゆかくろるすハ末なわ。あう字の
本ろう知おうば。ゆくよりけうゆるるしあるべ
きぶたあよそ中初よかうこ注ー次よ文すろを出。
いろはをほくなどくて。いぬ字をば赤よ玉也。
一假名の様を知くむと思くぐ先おくの出る初の

振を知へしゆろくーの顔字ハすべて知ゆるず。天竺二
乃悉曇(えうん)しるげるよ梵字をかくやうをおらいくる
ゆるとるて。はうぐくーさるすハ知ゆるねど此國ハ
天竺よハをなどの聲ハかへりて能通じゆろう
よハぶん花見月など先角をいいてほよ体をいふ
をもてよハ花を見る月を見るとやうよ先体うり
ちうかくさ成し。天竺よ似られば。乾よりてだよ
おろくんはゆるやうをゆだし。凡人のおいそむと

さて時候の内に風あり。天竺にては此風の名を優陀那といふ。風かの風を引て丹田より腎水を擊て起す。時斷齒脣頂舌咽胸の七所に觸れ喉内舌内脣内の形状に依て指くの音聲あり。とくべつを其數五十音に過ず。唯人間のことばのみ。上八佛神より下八鬼畜に到るまで此あらを出す。又唯有情のこゝにあるのみ風の本より有あのゝに觸てたゞこゝの非情のあらゆるでしられ

まわかに出るなり。息の字乃ちこの自ハ鼻なり。鼻ハ息の通ふ所なり。鼻ハ肺脉に屬す。肺ハ金なり。金に風の精なれハ同氣相感して風を引時に肺先受るなり。清涼の出るとゝもまつなり。心に從ふ心の動靜に因て息に緩急あり。脈と息の相性なり。息に從ふ脈なり。密數に此息をやとて心と說くなるあり。一條の息につゝのるに似たれとも命にしたがへかれり。

むと雖今と云今て紀ろ云ふなり此ときを
ゝ知ゝハ法身佛の常恒演説の法なり此一
息を出へゝす。泥石ハ葉よ和歌を日本の陀羅尼
なりといへるハ陀羅尼を此よは摠持と翻す字
音の功德を摠攝し任持なるなり。を中よ
一字よ多義を含むことをもて短き和歌の詞
ときを含むをかくいふなり。多くの字和歌
よ法ゝ多くあれ共陀羅尼とゝ

へし。金剛語菩薩を無言大菩薩といふ。言
の実ありなきなりと言ふなり。言を
摩訶衍よ五持の法とぬる中よ如義
言説とゝ云たゝハ法の命なれハ身ゝ形
白き多あれと方像をうつすときゝ
ゝ。

一 次よ文字の様を知へし。梵字ハ劫初よ梵天
王天竺よ来下して作ゝ故よ梵字と名付ゝ。

但尼ハ縁起のことくなれ。実ハ此聲字法然
として本有なれば。法身如来大日經金剛
頂經の中ニ。字輪ハ字母ハ法たまへり釋尊
ハ。華嚴。涅槃。般若。文殊問答の諸經ニ。文字
くゝ字母を説たまふ。大日經ニ。本不生。故阿字
現形(スヲ)とのたまへり。如来を初として。諸仏
ろ人なり。法法本不生等の道理なり。法ハの字
ハつゝ形を現ずるなり。聲字の下ニ心ハ義

あり。尼を実相といふ。壁ハ空ハ人のこゝろ。音ハ
言なり。我ハ心なり。尼を形音義とする。此三
法字ニ相融ずるなり。凡三如を根本と
て一切法法ハ生ずといふ。部(ぶつ)途の法ニ
て。法界此域を出ざる。圓覚經。守護經。理趣釋
經等ニ。陀羅尼ハ真如を生ずと説たまへり。
陀羅尼ハ文字なり。其功用(くゆう)ハ序ニ説
いてあり。胡國ニハ佉婁(きやろ)仙人出て文字を作

り漢土ハ蒼頡鳥乃跡を見て作りし梵字ハ
次〳〵ていとゝまゝ〳〵ハ本有の字乃縁を借く
ゑゝハ那りゝちゝ。ゑゝハ史ゝ石ゝ本の中ハおより
あれゝゝ人の力にまして那りゝちゝ〳〵文鏡秘
府論の序ハ云。空中塵中。開本有ゝ字。龍上
龍上演自然ゝ文ゝとゝちゝ。此を河圖洛書すてゝ
自然の文ゝれゝるの跡とるすゝへて四ゝし。
此國ハ神ゝ人ゝ文字を作り跡をめ海ゝ

ひて知るへきなりゝるゝへし
一 梵字の字を悉曇ゝいふ。悉曇ハ梵語ゝ
成就と訳す。元ハ伝て世間出世乃の一切のるゝを
成就ゝれゝゝちゝ。其字母四十七字あり。初ハ十
二字あり。摩多の字ゝいふ。摩多ハ母と翻
す。又點畫ゝ韻ゝいふゝゝ。和語のゝめハ
ゝ母を取ゝハあいうえおの八字なり次ハ二十
五字あり。體文ゝいふ。中ハ初ハ五類聲ゝ

文字あり。次ゝ通口聲とも滿口聲ともいひて十字あり。同音濁音を除てあを取よかさたなはまやらわのん字なり。されの文字に合きて十四音のわ。涅槃經文字品よ。善男子有二十四音名字為二字義一と説うを紙へるよ付て。和漢の諸師奥ゝ我ゝ〳〵なる中ゝ。信範法師とゝ。今の十四ありといふ。ちもあわぬきうすきわ。初の文字ハ喉音なり。を中よ。あハ口を開く。れのうたう

あ〜て激原よ喉内よ岩にあわてわざといそぎれ
ゝし息の出入よ原ふ故よ。經よ有情及非情阿字の
第一命と説たまへるゆ先ハ此故なり。韵よ。ふ
う亦聲よて。豎よハいうつをて出て摸よハかさた
なはまやらわを出て低今南よ向へる市町の。
南ゝ西ゝよ大海あるん。を西南の角を負ゝる
家の。西よあさなひ。南ゝよう〜んぐゝ〜おて〜ハ
一切の聲の初よて。一家の高祖のごゝ〜。梵文の法

字をかくに筆をてすさえ初の一點皆阿なれば法字
法音の行ゐるり種ゐに任持と引生らの二義
あわ。法音を皆阿の中に納めて失なわねは任持
なり。法音阿より出るハ引生なり。字の義と同し。
梵本の阿字に本不生の義あり。一切法法本有に
して。今初て生ずるにあらず。此義より一切
の義ハ生ずれば又義の初なり和合は只聲のみ
あわ。そあのあ舌に留て持ずるあなり。梵

文に伊字を根本の義といふなり。草本の行を
蔚てそれより初て根を生ずるがごとく。阿の聲初
て持ずるねなり。うハ脣に留て持ずをいいなり生
ずといふ時。舌に留て。字初に微隱するいのなりて
ひていいといいるをハうより生ずるねに。初に微隱
なるうのなりて。脣に留てうをいいるをいに字
しゆを初にゆづれば阿より生ずるり九聲の字か
そあのあすうに喉のそとに当て持ずたるあ

なり。喉音なり。牙は舌根を牙音といふ。梵文
は迦を作業の字といふ。あらの動きて外に出る
初まれば なり。さたなはは舌音なり。さは舌の本
は舌を又歯にあてなり。歯音といふ。たは舌の
中ほとりを舌根歯を弾じなは舌の末にて齶を
弾ずるなり。又なは鼻音は根は陀羅尼の中
は鼻音と法なり。鼻をいきく塞ぎて口
なにぬねのくるまはみと言はれぬなり。はまは

共は脣音なり。はは脣の内は舌根にまは脣
のみは舌にて出。あらこるの七音。喉舌脣
と次第して。又三内の中は各次第あり。やらわの
三音は。よりは遍口聲はくるの中は満ていると
なり。其中はやは喉音なり。舌をるるていると
らは舌音の心極なり。舌の端をまてたなりて
狂齶をつくる弾じていると。ゐの舌まは舌を下
歯は著ていると。ゑは口はいとれず。梵文の羅字は

牙の行なるなり。舌ハ心脣ハ唇に属す。牙ハ升ろを性とす
れば自然よわ強せり。わハ喉音なれども唇なるを兼
てはの字まわと牝唇の内ハ乗ふりに絡ていなる
右のニ音又喉舌唇の次第第なり。梵文の法ハ摩
多の字を省して梵文の字に加ふ省すれば漢
字のニ水省るのごとし。迦ハ伊を加ふれば拒となり。
宇を加ふれば倶となり。曵を加ふれば計となり。遠を
加ふれば古となる。迦伊及拒迦宇及倶。迦曵及
計。迦遠及古なり。拒を引くバ伊となり。倶を引
けハ宇となり。計を引けハ曵となり。古を引け
ば遠となりて。韻皆摩多の聲に効ひ。点畫なし
ふりち韻なり。さたなるに加ふるなり右に如な
しなりて四十二十六音を生じて。和合五十音
なり。ニ十六音ハ聲韻和合してせざるなり
ね。梵文ハ字ともに和合してせざるバ初よりき
くけこ。しすせそ等の字体なり。漢字の法実

なるなり。所生の音の字し面くにあり。されなり
ていろはハ能生所生ともいへて出さわ。九聲ハ
又四韻ハ母。三十六音ハ子なり。佛法ハ父母といへども
母を先とす。梵文より先ハ摩多あり。摩多
の功よりわてきくけこ等の音生ずる此理なり。
儒ハ父を先とす。體文といふ此理ハ南北わ。又
摩多ハ陰なり。梵文ハ陽なり。不生の音ハ陰陽物
のごとし。又摩多ハ緯なり。梵文ハ経なり。経緯

交りて絹布をなすごとし。所生の音を業
聲といふ。梵文の字ハ動きて業用となるなな
り。又梵文をバ男といひ業聲をバ女といふ
又梵ハ強く業聲ハ弱くなるなり。梵語
ハ泥犂といふ天なり。犂ハ伊點を加へて泥尾と
いふ。男天を呼時ハ泥犂といひ。女天を呼時ハ
泥尾といふ。これ男女ハ相違して呼なり。ゆゑに
ハ此意あり。和語ハいくぐ。天をあまといふハ男

聲あめとゐは女聲なり

一 五十音圖

竪ノ各行、五音相通
横ノ各行、同韻相通

喉音 聲韻一体 諸音能生本	舌音 唯韻非聲 安所生	脣音 唯韻非聲 安所生	末舌 唯韻非聲 以所生	末脣 唯韻非聲 宇所生	
安あ	以い 省人	宇う 省于	江え 省工	遠を 省袁	喉 内
加か	賀き 加以切	賀く 加宇切	賀け 加江切	賀こ 加遠切	喉 外 兼牙 安所生
左さ	左し 左以切	左す 左宇切	左せ 左江切	左そ 左遠切	舌 本 兼齒 以所生
太た	太ち 太以切	太つ 太宇切	太て 太江切	太と 太遠切	舌 中 以所生
奈な	奈に 奈以切	奈ぬ 奈宇切	奈ね 奈江切	奈の 奈遠切	舌 末 兼鼻 以所生
波は	波ひ 波以切	波ふ 波宇切	波へ 波江切	波ほ 波遠切	脣 内 輕 宇所生
末ま	末み 末以切	末む 末宇切	末め 末江切	末も 末遠切	脣 外 重 宇所生
也や	也い 也以切	也ゆ 也宇切	也え 也江切	也よ 也遠切	喉 兼舌 遍口 安以所生
良ら	良り 良以切	良る 良宇切	良れ 良江切	良ろ 良遠切	舌 卷舌 遍口 以所生

和わ

契ね 和以切

犁う 和宇切

犂る 和江切

饗れ 和遠切

喉 兼胥 安遍口 宇所生

右の圖梵文より流れて伝はる。西域記より法佛法代の音あり。中天竺より用ひたり。韻鏡序よりも胡僧及切のぬを中華の僧より傳ふといへり。此胡僧らふといへ〻へ胡國天竺のわうちぬときまへばわ〻時。天竺をし胡國といひけるなほ絶まへてもわ。ろより流〻へて。梵僧を胡僧といへるなり。東寺の

悉曇雲中京度を傳へて。南天竺を蒐るなり。山門は南天竺を傳ふ。南天は中天より次で。東天北天よりも音韻詳雅なり。中天は漢音れほく。南天は呉音お用ひ。假令達磨は沈の梵語梵字よりは達磨かくのごとし。東寺まゝこれをたゝまとよみ。山門はだるまといふ。禪宗の初祖達磨大師。台家の傳より呼来れわ。これより付て。漢音なるべたゝ都麻呉音なるハ駄都麻念珠の母珠を駄都麻と

ん羅麻とし。駄留麻としてもむるは。梵語のおろはの
の字のごとく半体の羅字あるは上より入聲の
字を用ゐる理あり。ra羅此半体は上の𑖭の上に加へる
ra かくのごとく。羯磨中天さうまる南天けるま薩嚩中天さうば南天さるば此
等の類也。da ハ本濁音の字なれば実は東寺の傳
駄羅摩dara といふべきを。此國にてはさるれなる清
てゝとまいりは故実なるべし。苟し平聲氏を稱
謂あり。としきゝへるるすあり。思ひ合べし。駄留

麻と字をかきはこゝにあれ。艶なる人は用ゐるあるべく。
げにゝゝしくぞ。跡を加へて女聲よるめば。
達弭達謎達謨などは東寺なるれまる清く
いふるとのごとく。山門よは。駄留弥駄留謎駄留
謨とまむ。日本よは真言宗獨り陀羅尼の
たゝよ悉曇を傳ふる故よ。是れ宗まで。
の名目狂ふまり。中華よは。密教失れば悉曇
をし知る故よ名目さへ失まり。新渡の禄僧の

達磨大師を駄茂といふよて知へし。ゆ物よて八耳を
聳るゝすなり。彼方の人そ又世方よりふやう
を受て聳るゝくへし。佛陀と菩提と梵字八同し
くれども。音の相違ゝよ依て義も違て実なり。混
同すべからず。此國よて仮を使ふ事を謬ふといふな
淆へて知べし。又中毒八晩宋よ初りて天下を
毒八令人よ奪ふれ。流よ蒙古のゝ時よ令く奪
りれて。え朝ゝなりぬるなり。小狄の音よ変じて。

わろ〳〵成るゝよや韻會字彙等を引くよ。玉篇な
どの音よたがひて。某切。音某といふよ。切ゝ音ゝ叶
はぬるおほし。彼八某切といふゝ音の訛ゝ
中あるなり。本朝八芳ゝ和漢の人をめして
音の博士を定うせたまひて。伝へまれるゝ呉
漢今よ替ゝず。又梵字にゝりてたゞすよ。類ゝ
さるのゝなり。彼今門の字伝をとゝむ。をあ
の第五轉よて。梵字の行令く別ゝり。阿ア遠

かくのごとく。欲の韻の字を虞の韻の音よむ事
いはるゝ。鵡の字ハかゝるのあとなくおくにちて
依まち。今の爲とてしをゝとハちがれば是を依と
してと誤を知へし。陀羅尼を誦だる者。阿闍梨
の傳授を待ずして恣に誦ずるバ聲字を誤ま
ず。章句を誤まりて。効驗なくして却て罪を
得るもあり。さるよりて越法として佛大きに誡
しめ給へり。此に準ずるに。和歌ハ非佛にしたむ

ゝ如くれば。殊に假名をたゞして。まつとわりよそむ
あやうよすべし

一いろは字體

以 余止切。吳漢同音
仁 而眞切 吳音略
止 和訓萬葉集等常用 乃都切 吳音
奴 呂 良渚切。吳漢同音。再反
保 補過切。吳音
知 猪移切。吳漢同
留 略周切。吳音
波 博何切。吳漢同
ヘ 甫勿切音弗略音保。保与救通用
利 力至切。吳漢同
遠 于阮切 吳音略

和 胡戈切。吴音
太 他大切。漢音略
川 加川方葉集續日本紀續日本後紀等並用
良 力張切。吴音略
爲 于偽切。吴漢同
久 居柳切。吴音
加 古瑕切。吴漢同
礼 力底切。漢音略
称 年禮切。吴漢同音略
武 亡禹切。吴音
乃 奴改切。吴音略 那。那与能通用
也 余者切。吴漢同
与 余擧切。吴漢同
曾 子登切。漢音略
奈 奴大切。吴音略
宇 于甫切。吴漢同
於 央閭切。吴音
末 莫葛切。吴音略

計 居詣切。吴音
江 和訓。萬葉集等多用
左 作可切。吴漢同音
女 和訓。萬葉集等常用
惠 玄桂切。吴音
世 尸制切。吴音
不 甫負切。吴漢同
天 他前切。吴漢同音略
幾 居衣切。吴漢同
美 亡鄙切。吴音
比 必以切。吴漢同
寸 千鈍切。吴音略
己 居喜切。吴音
安 於寒切。吴漢同音略
由 弋周切。吴音略
之 止貽切。吴漢同
毛 莫刀切。吴音略

右の中よへいへの字よあくどと人の四へるハ音の
遠へるよ依てなり。此字いろはの外古き他古てり
用ゐるを見及ばず。但日本紀ハ覇の字をへるよ用ひ
弘の字我をよ用乃ハなとこそ更へきよ能と用ま
べし影ふべうず。或人四の字の極まれといひ四の
字日本紀万葉等假名よ用ゐるすべてなり。其
上片假名ハ真書の略なるよ今と用ひ四の字よあ
るるの略ゐるどを或人土なりと思へり字のやう

更よ似ず傍出を見ずして初別を假名よ用ゐる
を初めよ依てなり。止なるる片假名よ合をても知
へしれを濁音を用べゐねハれよあるず。別の字の
極まといひ大きよ誤まれり。字根訳よ礼の極ま
なり別のまよあるず。片假名よ合をても知へし
和語よ濁音を用ゐるの日本紀ハ呉漢おまちうの
業ハ呉音がちまて漢音をも用ゐる他をまる
す次上のた阮よ漢音の略なり。又漢音用べゐずハ

何ぞとをとりといふなり。自階相違さりつゝ俗よかどつといひて門の字と旦へつゝ音訓さりよつとよむべき理なり。又門の字都豆切なれば此吳音といふ人あり。さる用ゐられぬ文字用ゐるべくしたり。萬葉第十八に待を末川とかき。續日本紀に稱德天皇の宣命の中に用ゐ。續日本後紀に尾張連淚を欲を載せられし。此字を用ゐられ。ものこたへず。第五にかやうなれし。亦片假名よつとかくし。若し此字なり。

川をつとよむ。ハはのこなり。万葉に河津とし河門らしとあり。ロを江にあつすといふ人あり。和名抄に人ず。片假名を男に合せ放ちわめを女にあつずめ。りとふし。和名抄に撰ぬ。そ上ぬの字を假名に用ゐるなり。日本紀第六下にあるなり。

一片假名字體

イ 伊　ロ 呂　ハ 八 全欵。常用之。或半字半体欵

二 二 全欵。常用之。

或仁半体欠古筆作尓如字　ホ　或作ヲ　へ　ト　止和訓

全字　共保

千　和訓　リ　利　ヌ　奴　ル　流　ソ　乎

ワ　曰欠和欠或作禾和也　カ　加　ヨ　与或作ゟ与也　タ　多

レ　礼　ソ　曾　ツ　川和訓如前云　子　如字全和訓或作不祢也

ナ　奈或南欠　ラ　良　ム　牟或某作ム此全欠　ウ　宇　井　如字

全訓　ノ　乃　オ　於古筆多於作於　ク　久　ヤ　也

マ　末　ケ　氣欠介欠　フ　不　コ　已　エ　江訓

テ　手欠　ア　阿　サ　薩　キ　幾　ユ　弓略

メ　女訓　三　三全欠常用之或身半欠並訓或古本作ア混阿末詳本字

之　卍　慧本朝古書多慧作慧　ヒ　比　モ　毛　セ　世　シ

ス　須或作爪爲訓欠或左宇反須爪全字欠

片假名ヒらかの中より千子井号の全字あらハ名分

よ付て名付なるべし。去侍公の作るとゝ云ども。はを
ろ作なり。ゆ常のいろはと共に弘法大師の作り給
へる。狭衣よ片假名まてあちこかゝるよりはれ
ばゝの比まわしをるゝのさをなよ出来ることなるべし。
エとヱ。字し音し共よ相似ゝる故よ。人おほく混乱
してわきまへず。ヱハ慧の字を初の古筆よ慧
かやうよ。ねたくかきゝる中をえまゝる所とおほ
きなり

一いろは略注

色葉雖艶　散去留遠。我世誰曾。将
常在。　有為乃奥山。今日越天。　浅夢
不見。　酔毛不為。

問ていはく。色を弘法大師の製作といふ。ゝ徒ち
や。答ていはく。先大師出世の始の始ハ。在よし権迹とい
ひてあまねく知るゝるれと。地よ入てたゝるゝ
のかゝり。をいとで續日本後紀第四云法師在

於書法最得其妙与張芝齊名見稱草聖法
天皇の御時勅を依て屏風を書て奉り所ひくれば
帝すなはち御製の七言十韵の詩を賜ふ之初め
云深山居住振奇名水玉顔容心轉清世上草書
言爲聖天縱不謝張伯英之終日觀者目
眩曜共賞草書咲丹青絶妙藝能不可測二王沒
後此僧生既知風骨無人擬收置祕府最開情二
王とハ義之と献之とをいふ。真濟僧正の性靈集の

序云天假吾師多伎術就中草聖最狂逸格大
納云行成卿勅を依て美福門の額を修復せん
がためよ弘法大師をねがふ文 大江以言撰 云一心奉請弘法
大師尊像敬拏香花之奠驚覺而言今件
門額是大師之手書也制草之上露點雖消
入木之中風勢無盡所存筋骨似有精靈今
蒙明詔而欲下墨則疑有黷聖跡之冥譴更
憚聖跡而將閣筆恐拘辭明詔之朝章晉退

非心胡尾尖歩本朝文粋より載せりかやうの稱美
數を知らず。往化より。そもそもの物を究めし人
の初め動れる根より。大下に流布して。
なすべきなるべし。興教大師覺鑁上人の製作を集めて
ろ書を密宗諸祕釋といふ。その中より以呂波略釋
二篇あり。作者をいまだしらず。
ゝて物をれ多。其外釋日本紀日本紀纂疏
等大師作とあり。行阿の作者の製作といへるも

大師をさせり。ほ十七字といふ。千載集の序より
七ゝ。うぬのたくやまけふこゝてといふ。小倉昭
古物の古今祕注よりかくもいろはといふ。拾遺
愚草ゆゝ。壬二集のうちあり。そ悪曇
字母の数よりの假名をとてたゝぬるなくあ
まり事なく。世の淡近の事ども。出世源氏の玄
理を次第より述るる。おびばろけの人乃ちとちあ
す。七字でかれ行るとも字ずられ又陀羅

尼のごとく。若巧方便なるべし。そなハ花のまゝに
少しばかりすゝき人などハいむもあるべし。又佛法
伝をれ人などハ心ばせうとくすへうれよ。字を出乃やう
にまるをされば有為の奥山わけ入て知人もまれ
なり。いとけなきの病あるゝ時。菜としてのまれよハ母
の妹にぬるといふをもとれよ。けつちみいろはとハ字
而篇をといふごとく初のこゑをやゝて名をもろいろ
はハ母の古使なれば。字母といふよけつちこゑとい
へるをいつゝて又母の義なりといくむと弘法人
みくしし。梵語のはかくのごとし。悉曇を知まる人よ
ねぬべし。又梵文の伊字。根本の義なりとよいつゝ
しゝいゝを初よてゝ出されるハ法こと伝る
色〻こゑとふくに出さるり。万葉集第十五
もゝちはよおく白毫の色こゑより出と思ハことの〻く
こゑといふすけうよ初て尺くたり。ぎよの初く
せ出ゝ時こゑを尺てそれを知ごとくこゑを尺て

心を知せぶるをやうて紙ふとふるべし。俗語に
孔子孝をのこまへるに色紙しと侍し。釈の歌を
見てそのおとりを察してをまりうとろ
不孝有れやうにとろうすのたやすくれをのこま
つり。孝のこうすぶ人に交たるうとをうろうあ
なり。言ぶことのこいひてしたれるぶことばとし。
こうのたらいわがこと。ぶ今ふ紙とふ。紅
紙を塗ていへられ。ものこぢに限りてといへれ。

肌服の色紙ばとみ付られ書ぶいろはの色
紙のこうをを思ひて和子のこめにろ心ろ
へしぶを着といふよりとべられぶちわをふと
心得あり。陸奥とふ紙に遊仙窟に浜路
の字をにちふとうあり。特撰和歌集に白の字
をかせたまへりるのにほふとハ仙人の万葉抄
にたへハ白さとにつきていひまちにハあり。
つきていふ一日をそろぶ白栲と白細布と

しかはてもろ〳〵ととのへらし。楊の木し布し芸よ白
き地なるねよかく、義訓をわ。丹を柱とかきてた
へのほとよく。數白とかきてもこゝ〳〵とあるも同
じ。えちわ丹柱と。今丹さいへる類皆よにつま
同じ。ゆるぎばよハ丹。ほこハうるほふるといふまの詞
ちわ。翰日新よほへる山ちとうめるもあゝたるを
とわ。丹ハあゝきを本とすれど。柱〳〵の丹あるゞご
とく。白〳〵よにかよるどこゝろにもわて狂ずべう

らず。從本立名とてたとへバ楊枝ハ楊の枝をうつ
りてすゝ枝のみなれどもハ松杉等をもてしたる
も楊枝とのみいふごとし。このまほふとふハ
拙なわ。香をにほひといふふしをもるとのゝめ乃數
とすゝ枝なわ。茂玄留をとハ茂いぬるをといふい
をと略をゝちり。葉よ世去の字をねの形よおほ
くかゝわ。ふ二句ハ次の二句をいそむゝあの序ち。
六義の中よは比ちり。我世誰曾とハ。ふとハ人〳〵の上

の我なりたれゞハなゝゞなり。誰の字日本紀ア
なんぞとゝいゞれゞとゝ為わ。其名の人を法とゝゞ
たれゝとゝいふへし。法ゞとゝいひてはトのてゝをはか
けへゝゞ学ゆ將常(つねならむ)在ハつねあゝんを仁阿切奈
ゝれハつゝめていゝわ有為(うゐ)乃奥山(たくやま)とゝはよゝを指て
ふゝりゝゝゝゝのゝのゝむ極ハ險難ゝれバ奥山ゝた
ゝふ。今日越(けふこえて)天とゝは有為の法ハ皆虚滅ゝ為ゝゝ
ゝを知て。還源の思ひを發ゝして。ゝゝ為ゝ求ふ

時ゝとゝふゝゞけふゝいてゝと人をすゝめていゝざるふん
あわ。地極てハゝゝゝゝ変ゝゝゝ習ゝゝれハ。山ゝ奥を
きゝゝゝて越ゝゝれバ。又かゝるにゝりて里ゝ出ゝ
ゝゝゝゝ為ゝゝればゝゝはゝ為ゝかゝゝゝゝ浅義(あさきゆゑみ)不
見ゝとハ。世間浅近のゝゝ死の義を示ゝゝゝゝゝとなわ
酔毛(ゑひけ)不為ゝとハゝゝ明の酒ゝ酔て。生死の貪欲ゝ
ゝきゝゝて。眠ゝハ一向迷ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
酔醒(ゑひさめ)ゝゝゝ性空ゝゝゝゝゝ酔ゝ思ひゝゝゝゝゝ迷ひ

出ずんば、生死をはなれずと説くは大乘教の元祖なり。又一切衆生本有薩埵菩提心論文と説かれば、生死はもとより明らかなりて、醉やすて醒なり。例伶倫が醉屈原が醒。彼をし捨ずして此をしれば、醉醒共に捨て、不二なるは大きなるはもとより人。色すなわち佛なり不尺とは狂ほを指し、不ずるは中位をいう。梵書の阿字は無不北の三義あり。ずは不の字なれん。根本の伊字は始まりて、種子の阿字の義は

結歸して收指とも云ふ。終りて又始まる理あるなり。環の猶なきがごとし。梵文は阿を初とす。因業の訶字をはじめとし、因緣をはじめとす。拖字不生は拖とも云ふ。わわするに法なし。終は亦の字をおのれとは字母の終は。藍とも文二合。この二字あり。吽を界畔の字という。藍は今用なるべしばばくくれくれ。又は異體童の軌則を示す。實体字とは。梵字の法は別の字を二字三字

ニ文字まて續合をて字をわるなり。元又ハ迦と又と紙
合せて字なり漢字よりきたやといふ一字の音なけ
れハ元又二合とをして梵字よて一字ぞと知べしもろ
なり。二合等此よ注へて知べしさやうの三字を
もて京の一字の音とをるよて。絹の二字三字を
あハをて一音とする例を。彼元又字よ注へてこと
元ろれはつさていづまの字もあるべきに此字をし
ておうてハ心得へきよや。韻書よ山絶高曰涼。二

曰大也。又京師、天子ゝ居ス萬曰億。十億曰兆。十
兆曰京。といふ。梵語の摩訶よ大多勝の三義あり。
大といふよ及ばず。兆ハ多の義よ用る。絶高と天
子ゝ居とハ勝の義あり。老子よ域中に有四大といふ。
又一大を天とすがゝるんなる紙合て上の二十七字を
讃しておうれゝる元。又醉とをすと知ハ佛なり。佛あまこハ
淨土あり。佛ハ法王なれぞ。淨土密嚴世界を京
といふ元。いつれよしあれ。後ふんなる尋ゝ。元又字

た異躰重の様を示ものとすべし。郁蠹の義あり。
法字の義。此よりもて安極すべきなれば。彼よ法〻
へておのれだに。今いふ不の義あるべきよや。又彼も又ハ。
ロナセ字の内なり。今ハ外なるハの字なりの法〻
へてあるべよ。低名の数かきわきて。又京ハもと和
語よあらねハなるべし。

和字正濫鈔巻一終